

2022年2月27日大齋前主日

出エジプト記 34 章 29—35 節

コリントの信徒への手紙一 12 章 27 節—13 章 13 節

ルカによる福音書 9 章 28—36 節

本日は、大齋前主日です。今週の水曜日は、大齋始日ですので、水曜日から教会歴が大齋節に入ります。大齋節中は、お花を飾らない教会もありますが、本日までには飾っても構いません。本日、オルターに飾ってあるお花は、先週の水曜日のご葬儀に飾ったお花の一部です。お式は、逝去された信仰の大先輩が、教会のお花を大切にしてくださった方であることが、一目でわかるような色とりどりのお花でいっぱいでした。

本日の旧約日課は、モーセが、シナイ山から十戒の板を、イスラエルの民のところへ運んでくる個所です。福音書は、イエス様の姿が変わる、いわゆる「山上の変貌」の物語です。大齋前主日の福音書は、福音書の種類は異なりますが、A年、B年、C年共通で、この「山上の変貌」の物語が選ばれています。イエス様の受難の道を歩む前に、そのお姿が変わられたこと、そこから大齋節に向けて、何を学ぶかが問われているのだと思います。ことに本日は、そのことをモーセの顔が輝いた物語と合わせて考えるようにと、組み合わせられています。

使徒書は、パウロが、コリントの教会の人々に向かって、教会とは何かについて、語っている個所と、その後に「愛の賛歌」と呼ばれる、「愛」について深く語っている個所です。その意味では、この使徒書は、旧約日課と福音書に、直接、物語的な結びつきはありません。しかし、パウロが教会について語るとき、根底にあるのはイエス様の十字架と復活の出来事です。そして、先週も触れました通り、イエス様の十字架と復活に示された事柄とは、主なる神様の「愛」です。また、旧約日課における十戒は、律法の代表といえますが、この律法を与える前提にあるのは、主なる神様の「愛」です。主なる神様への「愛」の応答の仕方が律法に他ならないからです。その様に考えますと、旧約日課も福音書も、その根底には「愛」があるという意味では、使徒書も結びついているといえます。それゆえ、本日は、この使徒書を中心にして、改めて教会と愛について、学びたいと思います。

パウロは、手紙を通して、コリントの教会の人々に、様々な教えを語っています。先週までの箇所では、イエス様の復活についての箇所でした。本日の箇所は、そこより少し前でところですが、コリントの教会の中で発揮されていた、様々な賜物・機能・職務について語っていました。コリントの教会は、様々な賜物を発揮する人がいて、少し混乱があったようです。それゆえに、パウロは、「**体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である**」(1コリ 12:12)と、それらの賜物の優劣が大切なのではなく、それら一つひとつが部分として、組み合わせられ

て体を形成するようになることが大切であり、それが教会であると語っています。いわゆる「キリストの体なる教会」という考えです。そして、そのことを受けて、「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」（1 コリ 12：27）と表現し、28節以降「**第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです**」と続けます。そこでは、それらの賜物には違いのほか、ある程度の優劣があるようにも語っていますが、もっとも重要な事柄が、一つ一つの賜物が結びついて一つの体を形成し、教会として働くことだとする点は変わらないと思います。

しかし、パウロは、部分と全体によって体を形成すること、それが教会であるということだけを語っているわけではありません。その根底にあるのが「愛」であることの大切さを語ります。すべての賜物の根底にあり、またそれらが結び合わされる際に大切な事柄、それが「愛」だということです。それゆえ、「**そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます**」と「愛」について語っていきます。そして、その説明の中で、人間の価値観からどれほど素晴らしい崇高な事柄であっても、「**愛がなければ、無に等しい**」（1 コリ 13：2）という表現に代表されるように、根底にあるべき「愛」の重要性を断言するのです。

さて、パウロは、どのようにして、このような「愛」についての結論に至ったのでしょうか。そのことに至らせる大切な事柄の一つに、コリントの教会の現状があると思います。つまり、始まったばかりのコリントの教会の中で、教えを語る人、預言を語る人、不可解な異言を語る人など、様々な賜物が発揮され、混乱がおこり、それをまとめなければならなかったということです。誕生したばかりの教会を、どのようにまとめ、どのように導くのか、そもそも根本的に大切な事柄は何か、そして、そもそも自分はなぜユダヤ教の律法学者から、教会の使徒として歩むようになったのか、そのことを踏まえての事柄であると思います。

パウロは、イエス様に直接従った弟子ではありません。もし、パウロがイエス様から直接教えを受けた弟子であったならば、教会にいろいろな混乱があったとしても、イエス様の權威を継承する使徒として、その權威で教会をまとめることができたかもしれません。しかし、パウロには、そのような權威はありません。そもそもパウロは、イエス様の教えや活動に、人間的価値観で理解できる權威を見出したから、律法学者から改心して、使徒となったわけではありません。むしろ、人間の価値観から言えば、權威があるとは思えないような、イエス様の十字架の出来事に、主なる神様の意思、すなわち世界の初めからすべての被造物に注がれ続けてきた「愛」を見出して、改心したのです。そして、コリントの街に教会も、パウロが、死と敗北の象徴のような十字架の死、その逆説的な事柄を通して示される、主なる神様の意思・「愛」をパウロが宣教して、誕生したのでした。そのことから考えれば、その教会に混乱が起こり、教会とは何かが問われている、教会にとってもっとも大切なのは何か、それは「愛」ですと結論づけ

たことは、当然であったといえます。もちろん、パウロが今までユダヤ教徒として、律法学者として歩み、『聖書（旧約）』の内容に精通しており、そのうえでイエス様の十字架と復活の意味を認識し、そして、今の教会の状態を直視し、そしてこれから歩み始める教会の未来を見通したからこそ、導き出しされた結論であると思います。その意味で、「キリストの体である教会」、そしてその根底にあるのが「愛」であるという、このパウロの主張は、時間と空間を越えて、どの教会にとっても、どの信仰者にとっても、大切な教えであるといえます。

本日の使徒書の後半部分、13章でパウロは、その「愛」について語っていきます。『聖書』の中でも、有名な個所の一つです。パウロは、ここで愛について表現する際に、自己犠牲的愛を意味する、「アガペー」というギリシア語を用いています。それは、友や知識を愛するという意味の言葉や、男女間の愛を意味する言葉、あるいは、家族間での愛を意味する言葉とは異なっています。そして、この「アガペー」という言葉を用いていることが、一般的な神学議論では、とくに強調される場合があります。「アガペー」は特別な意味があるという説明です。しかし、この言葉自体に、特別な意味があるかということ、そうではないと思います。なぜならば、この「アガペー」という言葉は、イエス様が話されたアラム語、そして読まれた『聖書（旧約）』のヘブライ語で、「愛」を意味する言葉とは、概念やニュアンスが異なるからです。

『聖書（旧約）』のヘブライ語においても、「熱心な愛」を意味する言葉、「真実さと慈しみの愛」を示す言葉、「親切さの愛」を示すような言葉、「好みという意味での愛」を示す言葉があり、それらは、主なる神様の「愛」でも人と人との間の様々な場面での「愛」でも用いられています。ことに、男女間の愛で用いられる「熱心な愛」の言葉の訳語として、名詞としてまた動詞として「アガペー」という言葉が、旧約聖書のギリシア語訳で用いられています。

パウロ自身、ヘブライ語とギリシア語の両方を理解する者として、それらの言語の違い、概念やニュアンスの違いを、知っていたと思います。そして、だからこそ、『聖書（旧約）』のギリシア語訳でも用いられている、「アガペー」という言葉をここでも用いたのですが、その言葉ですら、「愛」の内容を言い尽くせるわけではないのです。つまり、『聖書（旧約）』からイエス様の十字架と復活の出来事までの事柄、そして今自分たちが教会として集められている出来事、その根底にある事柄を説明することは、「アガペー」という言葉一つでは言い尽くせないということです。そして、それ故に、長い13章の説明があるのです。

その13章の結びで、パウロは、「**それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である**」と語ります。この有名な言葉は、何を意味するのでしょうか。それは、イエス様を通した信仰に立つ限り、希望は無くならない、そしてわたしたちは、しっかりと歩むことができる。そして、そのようなわたしたちの歩み、それらをすべての根底で支えているのは、主なる神様の「愛」である。そのように述べていると思います。それは

言い換えれば、たとえ、わたしたちが信仰を失ったとしても、あるいは希望を見出せなくなったとしても、主なる神様の「愛」が、最後まで残る、そして、もっとも大いなる「愛」が、根底からわたしたちを支えてくださる。そうであるがゆえに、わたしたちひとりひとりの歩みは、決して揺るがない、悲しみや絶望では終わらない、ということの意味していると思います。

逆に言えば、この根底である「愛」がなければ、その上に何を積み上げても、虚しいということです。現在、戦いのニュースが入ってきます。この原稿を書いているときと、実際に礼拝をしているときとでも、刻一刻と状況が変わる戦いが行われています。それらの悲しいニュースからわかることは、「悪」を行うと宣言がなされて、戦いが発生していないということです。「平和」という言葉はもちろんのこと、「自由」「平等」を守る、「正義」、「大義」を実践する、「多様性」を認める、「人権」を守る、「弱者」を救済する、「少数意見」の反映させる、「隣人」との「連帯」する、それらの美しい崇高な言葉が語られ、そして、戦い起きているということです。すなわち、それらがどれほど連呼されたとしても、大々的に宣伝されたとしても、その根底に主イエス・キリストが示された「愛」がなければ、戦いに結び付いてしまうということです。そして、今、戦いが起きている国々も、主なる神様を信じる人がいて、教会がある国々です。そのように考えると、論理的に矛盾しますが、「愛」という言葉ですら、主イエス・キリストが示される真の「愛」が根底になれば、戦いに結び付いてしまうのかもしれない。

わたしたちの国は、主イエス・キリストを通して主なる神様を、多くの人が信じる国ではありません。しかし、「平和憲法」があり、わたしたちの国の方から戦いを起こすようなことはありません。しかし、「平和憲法」は、今起きているような戦いが、わたしたちの国に起きることを防いでくれるわけではありません。わたしたちの国だけが特別ではないのです。そのようななかで、わたしたちに何ができるのか、ことに教会に集められるわたしたちに何ができるのか、それを考えるとき、それは、主イエス・キリストが示して下さった愛を、わたしたちがもう一度最も大切なことであることを、すべての人間の営みの根底であることを、心に刻むことであると思います。『聖書』から学び、共に祈り、教会で支え合い、そこから示される「愛」に基づいて、平和のために祈り、その「愛」をわたしたちの教会で実践し続けることです。

先週、わたしたちは、信仰の大先輩と、この地上での悲しいお別れをしました。今、どれほどの悲しみが、同じ世界で起きているのか、そのことを思うと、本当に希望を失いそうになります。しかし、そうであるからこそ、主なる神様を信じて、その「愛」を根底において歩みたいと思います。主イエス・キリストが示す「愛」が根底にある世界の方が、どれほど素晴らしいのかを、教会を通して示していきたいと思います。